

## 紙芝居文化の動向 V

教育現場の紙芝居・宮崎二美枝の生活史と紙芝居実践

塚原 成幸

### Trends in Kamishibai Culture V

Kamishibai in the field of education: the life history of Fumie Miyazaki and the practice of kamishibai

Shigeyuki TSUKAHARA

**要旨** 紙芝居は 1930（昭和 5）年に日本に出現したとされている。紙芝居は「黄金バット」に代表される街頭紙芝居として発展し、その後キリスト教布教のために制作された福音紙芝居<sup>1)</sup>、幼児教育や学校教育の場で活用される教育紙芝居、太平洋戦争中に戦意高揚のために利用された国策紙芝居など多岐にわたる種類が存在する。中でも教育紙芝居は、その後の紙芝居文化を代表する印刷紙芝居の源流であり、教育紙芝居が現代の紙芝居文化の礎になっていることは至当な事実である。

本稿では、幼児や児童にとって身近な文化財の一つである紙芝居の存在に着目し、紙芝居を用いた活動を行ってきた教育者・宮崎二美枝（以後、宮崎）の生活史や実践を考査した。また、教育現場における紙芝居実践の可能性について検討を行った。

キーワード：紙芝居・児童文化・演劇表現・教育実践・紙芝居制作

#### 1. はじめに

紙芝居は主に幼児や児童を対象とした視聴覚教材として活用されてきた。かつては児童生徒の学習理解を推進するため定められる「教材基準」<sup>2)</sup>に明文化されており（1967 年度から実施された「第一次教材整備十ヶ年計画」により、紙芝居は除外、その後 1977 年「第二次教材整備十ヶ年計画」で復活）、教育現場と紙芝居の親和性は高いと考えられてきた。そもそも、保育施設や小学校をはじめとする教育機関に配置されている紙芝居は印刷紙芝居であり、これらは別名、教育紙芝居とも呼ばれてきた。

教育紙芝居の発祥は、1933（昭和 8）年に今井よね（以後、今井）らの日本日曜学校協会が「日曜学校紙芝居」を刊行したことによる。紙芝居作者であり児童文学作家の上地ちづ子（以後、上地）は、上地（1997）で、「(前略) 今井の活動は、キリスト教界を越えて、学校教育・保育・仏教界にも紙芝居を導入する原動力になりました。これらは、のちに教育紙芝居と称されるようになりますが、今井は教育紙芝居を創始したことにもなるのです。」とした。さらに教育紙芝居を発展させたのは、東京帝国大学（現東京大学）の学生でセツルメント運動を行っていた松永健哉（以後、松永）である。松永は今井らの福音紙芝居に感化され、紙芝居制作にのめり込んでいったが、1934（昭和 9）年に大学を卒業し小学校教員となったことから、教育現場において紙芝居の活用を推進した。この点につい

て宮崎（2023）は、「学校教育に紙芝居を活かしたのは、東大セツルメントから教師になった松永健哉氏が始まりといわれている。」としている。また、児童文学者であり絵本作家のかこさとしは、かこ（1973）で、「(前略) 紙芝居の生きる道は、芸術の分野でもなく、文化の分野でもなく、人格を通じての教育の場だと思います。」と述べた。

本稿は長年、自らも小学校教諭として教壇に立ち、紙芝居創作と紙芝居活動を行ってきた宮崎の語りを検証し、紙芝居に内在する教育的な役割とその可能性について論考したものである。

## 2. 紙芝居の教育的価値と特性

児童生徒を対象に教育現場で実演される紙芝居を教育紙芝居と考えた場合、その源流はどこにあるのであろうか。上地は教育紙芝居について、

現在の私たちは紙芝居を大きく二種に分けている。街頭紙芝居と教育紙芝居であるが、後者は前者を批判する部分をもつ代わりに、教育的配慮を加えて誕生したもので、今井よねらのキリスト教伝道紙芝居も高橋五山の幼児向け紙芝居も後者に含まれる（後略）。

（上地 1983）

とした。上地の意向に沿えば、現在の保育施設、学校、図書館、介護施設等で実演されている紙芝居の多くが教育紙芝居に含まれることになる。また、小学校教諭としての経験を持ち、児童文学作家の岡崎英尊（以後、岡崎）は、岡崎（1972）で、学校での紙芝居活動について、

小学校における紙芝居教材活用の学習活動は、基本的には文学教育の一方法である。すぐれた紙芝居教材は、目や耳を通して、理解されやすく、かつ選びぬかれた簡潔なことばで、リズム的な日本語の語いのひびきの美しさを感じさせつつ、子どもを文学の世界にみちびく。

とし、続けて、

教師と児童が一体となる共通の感動が、教室の空気を楽しく明るいものにたかめ、児童をして、主体的に人間としての生き方をしらずしらずのうちに考えさせる力をそなえるものだ、というようにわたしは理解している。

と述べた。（点線、筆者追加）

では、岡崎が指摘した、『人間としての生き方をしらずしらずのうちに考えさせる力』が紙芝居活動によって養うことが実際に可能なのであろうか。また、教育現場における紙芝居活動を継続するためにはどういったことが重要なのか。以下、小学校教諭として 35 年間にわたり初等教育にかかわり、紙芝居創作と実演をおこなってきた宮崎の生活史を考査し、一教師の実践歴から教育現場における紙芝居活動の意義と可能性について検討した。

### 3. 宮崎二美枝の生活史と教育現場における紙芝居実践

教育現場における紙芝居実践を討究する際、実際には教育機関においてどのような実践がなされてきたのかを知る必要がある。その点を明らかにするため、長年、教育現場で紙芝居を活用してきた宮崎<写真1参照>から紙芝居活動の意義について聴き取りを行った。宮崎の生活史を回想することにより、教育現場における紙芝居活動の可能性について考察した。



<写真1>紙芝居を持つ宮崎

(2023年6月5日、東京都豊島区の子どもの文化研究所内の会議室にて、約二時間半の聞き取りを行った。面接の形式は半構造化インタビューで実施。研究の趣旨は事前及び聞き取り当日に書面と口頭で説明し、本学紀要に投稿する旨を伝え、了承を得た。)

#### (1) 教育者・宮崎二美枝の生活史 (誕生から教員になるまで)

宮崎(旧姓は椎名)は、1951(昭和26年)年7月18日、群馬県千代田村赤岩(現邑楽郡千代田町)に二男二女の末っ子として誕生した。父は椎名三九三(しいな さくぞう、以後三九三)、母はなか(旧姓は川上、以後なか)である。三九三は富士重工業株式会社で飛行機のエンジン整備技師、なかは元々母親が営んでいた民宿の手伝いをしていた。誕生後は末っ子として大切に養育されたが、1953年、宮崎が1歳7か月頃、三九三が他界したため家計は困窮した。三九三が逝ってからは、母親であるなか働きながら子どもを育てた。その後、宮崎は東京都品川区平塚に転居。転居先は祖母が営んでいた大学生向けの下宿屋で母・姉と共に3人で同居した。兄たちは母親方のきょうだい宅で別居することになった。

1957年、品川区立京陽小学校に入学、1963年には品川区立戸越台中学校に入学した。1966年に東京都立大崎高等学校に入学。その後1969年、埼玉大学教育学部に入学した。入学とほぼ同時に人形劇実演と子ども会活動などをおこなう児童文化研究会に入会し、その活動に没頭した。1973年に同大学を卒業。大学卒業と同時にプーク人形劇団の研究生となり、人形劇人の道を目指した。また、ほぼ同時期に紙芝居作家であり、児童文学作家の堀尾青史(以後、堀尾)の紙芝居ゼミにも参加するようになった。1974年には文芸評論家の成瀬正勝の蔵書整理を堀尾より依頼され行うなど、堀尾を慕った。1976年(宮崎、24歳)に東京都公立学校教員として採用され、葛飾区立水元小学校に着任。以後、60歳までの35年間、小学校教諭を勤めた。現在は、紙芝居文化推進協議会<sup>3)</sup>副会長であり、同時に全国紙芝居まつり本部運営委員も務め、日々紙芝居文化推進のために奔走している。

(文中太字、被取材者の語り)

幼い時は正に末っ子という感じでした。父は私が1歳7か月くらいの時に亡くなったから、そんなに裕福な家庭ではなくて、私と姉は祖母のところで暮らし、兄さんたちは伯父伯母の家庭に預けられて生活しました。伯父伯母は館林市の隣にある邑楽町で教師をしていました。私は3歳くらいの時に上京し、私の祖母が品川の平塚で始めた下宿屋の一室を借りて暮らしました。

幼少期に父親を亡くした経験はその後の人生に多大な影響を与えることになった。なかでも居住地が変わったことは宮崎の生活を大きく変えた。時代的な背景があったにせよ、家族が離散しなければならなかった体験は想像以上に過酷な現実であったに違いない。

いろいろなことがありました。例えば、すぐ上の2歳離れた兄が中学の時だったと思いますが、母親に会いたくて、伯父叔母宅（群馬）から品川まで自転車で来たなんてこともありました。私は群馬で暮らした記憶はほとんどありませんが、故郷の記憶は鮮明です。小学生の頃ですが、母は仕事をしていたから、長期の夏休みは伯父叔母宅で過ごしました。そんな時はすぐ上の兄と一緒に過ごす貴重な時間でした。暑くてクラクラする夏、とれたてのキュウリやトマトを小川で洗って食べた時のトマトやキュウリの香り。すいか畑をはいずって兄と収穫したスイカを平手でバシッと割って食べたこと。犬小屋の子犬をねらってモウソウチクの林から大蛇がやってきて金網に絡みついたのをスコップで退治したこと、そういうことが鮮明に記憶に残っています。すぐ上の兄は、わたしの父親がわりの存在でした。

短期間ではあったが、群馬での体験は宮崎にとって心の原風景として存在し続けているのである。また、長期休暇の時には里帰りもしていたため、離れ離れになったきょうだいと再会できる喜びが記憶をより鮮明にしたのであろう。

東京に行ってからは戸越神社の隣にあるルンビニ幼稚園に通いました。でも、お昼寝が嫌いで、すぐに登園拒否になっただけで、働いていた母は大変困ったようです。当時は口数も少なく、おとなしい子どもだったようですが、頑固なところがあって、いやなことは「嫌っ」てはっきり言う子どもだったようです。小学校は京陽小学校というところに通ったんですが、学芸会では全くセリフももらえない子どもでした。

紙芝居文化推進協議会の副会長や全国紙芝居まつり本部運営委員などを精力的に務めている現在の宮崎の姿からは想像できない子ども像である。しかし、幼少期に家族を亡くし、生活環境が激変したことは、想像以上に大きな心労となったのではないかと。

中学校は戸越台中学校に通いました。中学では剣道部に所属したり、水泳を頑張ったりしましたが、それまでと違ったのは、本との出会いです。当時仲よくしていた友人の影響もあり、図書館通いになりました。中でも、壺井栄の世界にははまりました。『二十四の瞳』はもちろん、『坂道』なんかも好きでした。壺井栄の世界観は正に私の子どもの時の記憶や思いと重なるところがあったと思います。そうこうしているうちに勉強に気持ちが向いて成績も徐々に良くなりました。

中学生になると宮崎は活字文化に魅力を感じ、読書の世界に傾倒していく。多感なこの時期に多くの作品にふれたことが、その後の創作活動を支える礎になっていったのである。

高校生活はとにかく楽しかったです。担任の志村先生は、社会への視野を広げてくれた方です。先生からは人間の尊厳について、差別はあってはならないといったことを教えてもらいました。ホームルームでの話し合い活動は今でも映像のように浮かんできます。英語の先生は英字新聞を小脇にかかえてさっそうと教室に入って、教壇から身を乗り出し、つばを飛ばして授業してくれました。この高校で「先生ってかっこいい」という印象を植えつけられた気がします。課外活動は書道とコーラスに所属しました。書道は何回か表彰され顧問の先生に専門的に学ぶことすすめられましたが、表装など大変お金がかかることを知り、やめました。また、金銭的に負担の少ない国立大学現役合

格を目指して、勉強を始めました。家庭に経済的なゆとりがなかったので、高校三年の夏休みは友人と塾に通い受験まっしぐらな生活をしました。

高校生活の充実を反映してか、宮崎の成績はどんどん向上していった。成績優秀者として廊下に名前が張り出されたこともあり、学業に対しても徐々に自信をつけていった。高校卒業後は、埼玉大学教育学部に進学し、教育学を専攻することになった。

教員になろうと思った理由はいろいろあると思いますが、やはり伯父や伯母の影響は少なからずあったと思います。元々は本当に人前でしゃべるようなタイプの子どもではありませんでした。集合写真では端っこにいるような内気な子が、大学生活でやっと自由に自分を出せるようになったんです。大学に入ってからアルバイトもしましたが、児童文化研究会というサークルに入ったことが自分の人生を大きく変えた分岐点だったと思います。

中学生の頃から図書館通いを続けてきた宮崎であったが、大学生になり児童文化との出会いを果たした。大学で宮崎は教育方法学を専攻し、卒業論文では「子どもの発達と児童文化運動の教育的意義」を発表するなど、在学中は児童文化一色の学生生活を過ごした。

在学中はサークル活動にのめり込みました。サークル活動では、埼玉県下のへき地や分校、子ども会に行って人形劇の公演をやりました。大きな荷物を抱え電車やトラックに乗り継ぎ、舞台を作り、食事を作り、体育館に雑魚寝をしながら公演しました。子どもたちのキラキラする瞳に魅了され、学友の真剣な文化論に刺激され、この頃が人生の中で一番キラキラしていた時期かもしれません。

長年にわたり児童文化活動に身を置いてきた宮崎の原点は大学時代の経験である。宮崎は埼玉大学入学とほぼ同時に児童文化研究会に入会し、人形劇と子ども会活動に没頭した。卒業後は、学友が子どもの文化研究所<sup>4)</sup>で働いていたこともあり、児童文学講座などに参加するようになった。

大学を卒業してからは人形劇を続けるために、ブーク人形劇場の研究生になりました。選んだ理由は、もっと人形劇をやってみたかったんだと思います。でも、続けていくうちに、私には向いてないこともわかりました。移動につぐ移動のような生活をしていたら、クタクタになって、すごく痩せたりして、集団生活を続けることは私には向いてないと思って、人形劇を続けるのは無理だと判断しました。

大学卒業後、宮崎がはじめに選んだ道は人形劇人であった。宮崎は卒業論文の中で児童文化運動の有用性について論じており、この考え方を体現するためにも人形劇の世界に身を投じる必要があったのではないだろうか。しかし、現実的には宮崎に適したフィールドは別の場所に存在した。それが、学校教育の場であった。

けっきょくは学校の先生になりました。でも、大学を卒業してすぐに教職に就かずフラフラしていたことで、私の人生は豊かになったと思います。この時期に児童文学作家・紙芝居作家・人形劇人・映画評論家・民話研究者・紙芝居実演家など様々な方と出会いました。堀尾先生から本の整理

を依頼されたり、紙芝居実演家の秋山芳英さんと紙芝居興行をして歩いたりして、世界がどんどん広がっていきました。この時、子どもの文化研究所で児童文学を学んだことが後々の自分に大きな影響を与えました。きっと卒業してすぐに先生になっていたら、視野はすごく狭かったんじゃないかと思います。

こうして、1976（昭和 51）年、宮崎は東京都の公立学校教員に入職し、葛飾区立水元小学校に 24 歳で着任した。以後、52 歳になるまでは担任を持つなど一貫して小学校の教壇に立ち、その後は図工教師を経て 60 歳で定年退職した。

## （2）宮崎二美枝と紙芝居

私が記憶している紙芝居の記憶は家庭科の先生が演じてくれた紙芝居「金のおの 銀のおの」です。初めて見た時の印象は、大好きな先生がしてくれたというのものもあるけど、心地よさというのはありません。当時、読み聞かせという考え方はまだなかったし、紙芝居特有の劇的な感じに強く惹きつけられました。

石山（2008）によると、「1957 年（昭和 32）年末にまでに都内の紙芝居業者が 800 人余に急減」となっており、宮崎が品川区の京陽小学校に入学した時点で街頭紙芝居にふれる機会はそう多くはなかったと推測できる。しかし、慕っていた教師による実演は宮崎の心に深く刻まれ、紙芝居体験の原点となった。

紙芝居の制作のきっかけは、大学を卒業して人形劇団の研究生をしている頃、堀尾先生の紙芝居ゼミに参加するようになったことです。小さな舞台でドラマが展開され、演出も語りも自分自身がすることが楽しく感じました。紙芝居の脚本を書いてみようと思ったきっかけも子どもの文化研究所で堀尾先生に指導を受けたからだと思います。今までに復刻版を含め、三十六の紙芝居をつくりました。（別表 1 参照）

表 1：宮崎二美枝が創作にかかわった紙芝居

通し番号	作品名（タイトル）	原作	画	出版社	出版年	場面数	備考
1	ありのえんそく（たのしいえんそくシリーズ）	椎名二美枝	西村繁男	童心社	1988年	12	童心社・脚本コンクール入賞
2	きんのうりぎんのうり（美しい心シリーズ）	宮崎二美枝	石橋三宣	童心社	1988年	12	童心社・脚本コンクール入賞
3	おねえちゃんとおむかえ（げんきななまシリーズ）	宮崎二美枝	藤枝つう	童心社	1991年	12	
4	だいちゃんのおかしなひなんくんれん（防災紙芝居・じしんだ！かじだ！）	宮崎二美枝	尾崎曜子	童心社	1992年	12	
5	あわてんぼうのうさぎくん（交通安全・かみしばい）	宮崎二美枝	宮崎耕平	童心社	1993年	12	
6	おばあちゃんとレッツゴー（ゆかいなこころシリーズ）	宮崎二美枝	箕田美子	童心社	1993年	12	
7	原爆の子さだ子の願い（平和紙芝居・私たちの声をきいて3）	宮崎二美枝	江口準次	汐文社	1994年	12	
8	タオルちゃん（げんきななまシリーズ）	宮崎二美枝	高橋由為子	童心社	1994年	12	
9	母の日のおばあちゃん（ゆたかなこころシリーズ）	宮崎二美枝	藤本四郎	童心社	1996年	12	
10	バリバリいこうぜ！（学校探検紙芝居・どきどきわくわく一年生 入門期の生活科）	宮崎二美枝	福田岩緒	汐文社	1996年	12	
11	どろんこぎつね（げんきななまシリーズ）	宮崎二美枝	篠崎三朗	童心社	1996年	12	
12	ゆうわくのマシーン	宮崎二美枝	長野ヒデ子	汐文社	1997年	12	
13	また、あおうね（バリアフリーのかみしばい）	宮崎二美枝	高橋 透	童心社	2001年	12	
14	どんぐりの家（紙芝居障害をのりこえて1）	宮崎二美枝	清水 洋	汐文社	2001年	12	

15	うんちくん (からだってすごい！)	宮崎二美枝	大和田 美鈴	童心社	2003年	16	
16	たぬきのがみ (ともだちだいすき)	宮崎二美枝	長谷川知子	童心社	2003年	12	
17	ゆうきのビビンパワー (みんなでまもろう！たいせつないのち)	宮崎二美枝	長谷川知子	童心社	2005年	12	
18	もぐもぐごっくん (年少向けおひさまこんには)	宮崎二美枝	久住 卓也	童心社	2007年	8	
19	ずっといっしょだよ (いのちを大切に紙芝居・生きるよろこびがいっぱい)	宮崎二美枝	鈴木幸枝	童心社	2007年	16	
20	かめくんファイト！ (みんなでいっしょに、うれしいな！子ども参加かみしばい)	宮崎二美枝	やべ みつり	童心社	2007年	12	
21	あーん (年少向けおひさまこんには)	宮崎二美枝	山本 祐司	童心社	2008年	8	
22	ごはんですよーっ (かみしばいおいしくたべて、げんきな子 食育)	宮崎二美枝	長谷川知子	童心社	2008年	12	
23	もりのうんどうかい (ともだちだいすき)	宮崎二美枝	夏目尚吾	童心社	2009年	12	
24	ひとりできるよ (がっこうってたのしいな入学準備かみしばい)	宮崎二美枝	夏目尚吾	童心社	2009年	12	
25	まいごのトコちゃん (教育画劇の紙芝居)	宮崎二美枝	谷村あかね	教育画劇	2012年	8	
26	わっ！びっくり (なんだかわかるかな？絵で遊べるかみしばい 年少向 園児参加型)	宮崎二美枝	本信公久	教育画劇	2012年	8	
27	こんどはぼくがおにいさん (卒園・進級かみしばいみんなおめでとう)	宮崎二美枝	夏目尚吾	童心社	2012年	12	
28	どっかーん (はじめてみよう老人ケアに紙芝居)	宮崎二美枝	おかのけいこ	雲母書房	2013年	12	
29	オニのごちそう (アッハッハ！笑いどっさり！おいしい日本のたべもの民話)	宮崎二美枝	藤本四郎	教育画劇	2013年	12	
30	れんしゅうしてよかったね (もしもにそなえる防災かみしばい)	宮崎二美枝	夏目尚吾	童心社	2014年	12	
31	いちについてよーいどん (ともだちだいすき)	宮崎二美枝	垂石眞子	童心社	2015年	12	
32	まてまてまてー (あかちゃんかみしばい いっしょにこんには)	宮崎二美枝	いちかわ なつこ	童心社	2015年	8	
33	生きていた 青い目の人形	宮崎二美枝	松苗 れい子	自主制作	2015年	12	
34	かたつむり 狂言紙芝居	宮崎二美枝	亀澤 裕也	鈴木出版	2018年	12	
35	青い目の人形メリーのねがい	宮崎二美枝	片岡直子	文民教育協会 子どもの文化研究	2021年	12	第60回 高橋五山賞脚本賞受賞
36	平和紙芝居 原爆の子 子どもの願い (復刻版)	宮崎二美枝	江口 準次	南々社 (復刻)	2023年	12	

2019年7月27日、8月3日 茅ヶ崎市南湖公民館 手づくり紙芝居教室の資料を基に筆者作成

紙芝居というのは、人がひと塊になり集まって、小さな劇場のような場（空間）ができるという意味で絵本の読み聞かせとは歴然と違うものと実感しています。私が紙芝居を学校でやり続けた原点になるエピソードがあります。それは、ある年に発達に障害のある子が入学してきて、学級を落ち着いた楽しい場にするのに苦労していた時のものです。その子は、施設で育った子どもでした。入学当初はいつも教室内外で走り回っていたし、みんなにも私にも近づいてきませんでした。でも、その時に紙芝居が助けてくれたんです。当時、帰りの会で毎日のように紙芝居をやりました。紙芝居の舞台を置くと子どもたちは、さっさと帰り支度をしてかたまって集まります。そうするといつもの教室の雰囲気とは少し変わるのでした。

紙芝居があることで子どもがひと塊になるという視点は、興味深い視点である。紙芝居があることによりその場の雰囲気が変わる。そのことによって子どもたち同士の交流や教員との関係性、個々の子どもの心情にまで影響をあたえると宮崎は考えてきた。宮崎自身、人と人を結びつける紙芝居の力を自らの実践の中で発見していったのである。

紙芝居というのは、作品世界だけではなくて、演じる人、見る人をふくめて育ち合う文化なんだということをこの実践から学びました。子どもにとって紙芝居は私たちが劇場に行くような感覚を味わえると思います。空間や時間を共有するようなことや日常では味わえない緊張感や緊迫感を味わ

うことができるんだと思います。一日の学校生活の中にみんなで楽しめるわくわくする時間があることは、学級を楽しい場に変えます。このことが学校における児童文化のあり方だと思います。

紙芝居は作品世界だけを伝えるものではないと宮崎は考えてきた。この点について堀尾（1972）は、「紙芝居をやるというのは、ただ、作品を見せるだけのものではない。やる人がその人間性や人格のすべてをあげて積極的に文化創造に参加していることであるから。」とした。

紙芝居の題材は、自分が子どもとかかわった時に問題になったことや発見したことをテーマにすることが多いです。そう思うと、今さらながら堀尾先生が「子どものそばにいなさい」っておっしゃっていたことがよくわかります。私は堀尾先生から教えてもらった「いつも子どものそばにいなさい、子どもの声に耳を傾けなさいって」という教えを大切にしてきました。この言葉は紙芝居をするときも教育実践の中で常に私には響いていました。

「子どものそばにいなさい」これこそが、宮崎が堀尾から伝授された子どもと関わる時の極意である。宮崎にとってこの言葉は紙芝居づくりの指針になったばかりではなく、教員としての行動指針でもあったのだ。

### （3）宮崎二美枝の教育観

私が40年近く教育現場にいる中で大切にしてきたことは、大きな目標ではないのですが、担当する学級を居心地の良いところにしたということです。例えば、学校に来られないような子がいたら、給食でもって帰れるものがあれば包んで渡しにいった世間話をするとかです。紙芝居にもなりましたが、「また、あおうね」という作品はそんな中から生まれました。

「また、あおうね」〈写真2参照〉は2001年、3月に童心社から出版された紙芝居である。作者は宮崎二美枝、絵は高橋透が担当した。バリアフリーの紙芝居として出版され、国や文化の枠にとられない多様性を描いている。宮崎が教育現場の中で大切にしてきた、『一人一人の子どもにとって、教室を居心地の良いところにした』という思いが反映された作品となっている。



〈写真2 宮崎が脚本を担当した紙芝居〉

私は社会科が苦手だったけど、社会に目を向けるということは常に大切にしていたと思います。社会の問題をなるべく私の言葉で伝えるようにしてきました。特に命のことなどについてはよく話したり、伝えたりしていたと思います。どうして、自分がそういう大人になったかはよくわかりません。でも、差別なくみんな大切な存在であることは伝えてきました。きっとそれは私自身も虐げられる側にいた経験があったからだだと思います。従妹たちは家族的にも経済的にも裕福な暮らしでしたから、比べざるを得ない状況が幼い頃はありました。ずいぶん弱いものいじめにあった記憶もあります。だから「人は平等であるべきだし、差別は許さない」というようなことは考えるようになっていったんだと思います。また、子どものいいところはどんどん伸ばしてあげたいという思いがあります。そして、弱い立場であっても、いや、むしろ弱い立場の人を支えることが、けっきょくはみんなを育てることになるんだと思っています。

2023年4月10日、1994年に出版された『平和紙芝居 原爆の子 さだ子の願い』が南々社から復刻出版された。この紙芝居は、広島市の平和記念公園内にある「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子を主人公にした平和紙芝居である。原爆症を発症し、中学生になる前に亡くなった主人公が、千羽鶴を折ることで叶えようとした「生きたい」という願い。そして、その願いを受けた子どもたちの運動が、世界にまで広がったことを題材にしている。子どもの思いを汲み取り、子どもの願いを伝えることが宮崎の紙芝居には欠かせないテーマ性なのである。

教師として経験の浅い頃は大変な思いもしました。自分の家の子どもも小さかったし、クラスの中にどうしても暴力的になってしまう子どもがいて、けんかして殴るし、親も困っていたし、けっきょくクラスの中で何度も話し合いをしました。今の教育は無駄をなるべく少なくして、合理的に効率重視なんだけど、教育現場では話し合い活動がとても大切だと思っています。私の場合、話し合い活動で子どもたちは成長していきました。

子どもと向き合い、徹底的に話し合うとことで互いの気持ちが共有され、相互理解が促進される。長年、人形劇や紙芝居実演を通して育まれてきた宮崎ならではの考え方である。ここでも堀尾が宮崎に語りかけた「子どものそばにいなさい。多くの芸術に触れなさい」という教えが生きている。

私が大切にしたいと考えてきたのは、とにかく子どもの声に耳を傾けることです。それから、子どもは元々いろんなことを感じながら生きているわけです。命が失われることへの恐怖とか、社会の不条理なんかも感じながら生きていると思うんです。例えば限りある命についてもしっかりとひるまず伝えていく必要があると思います。子どもの顔色ばかりをうかがって、なんでもかわいくしたり、キャラクター化するだけでは伝わらない。厳しい現実もしっかり伝えるべきだと思います。ただ、おもしろい、かわいいだけではなく、しっかり事実を伝えていく気構えが必要だと思います。

近年、心的なダメージをあたえないように配慮する風潮が教育現場でも主流化している。しかし、真実を伝えずして確かな教育ができるのか、宮崎の視点は現代教育のあり方を示唆している。

そういう意味ではやはり一番説得力があり、伝える力があるのは、やはりドキュメンタリーだと思います。怖い、気持ち悪い、かわいそう、恐ろしい、痛々しいをしっかりと伝え、なぜそのような気持ちになったのかを問うことが教育には必要です。子どもたちは、本当のことを知りたがっているのです。

ドキュメンタリーこそ、相手にしっかりと伝える。宮崎はそう考え、実際に身近で起こった出来事を自らの創作活動に活かしてきた。真実こそ説得力があり、最も劇的であるということが宮崎の教育ポリシーなのである。

#### 4. 宮崎二美枝の創作活動と紙芝居実践

これから期待していきたいのは、ボランティアさんの活用だと思っています。ボランティアさんが読書指導の力を身につけているし、そういう人々が学校とかかわることで、互いに協働して授業をつくり上げていけたらと思っています。すすんで紙芝居実演をしているボランティアも多くなります

ので、学校の授業にもっと参加してもらえたらいいと思います。

宮崎（2023）は、「これからの紙芝居活動を学校・学級・教師たちと協働していけるのは、図書ボランティア・読み聞かせボランティア・読書ボランティアという地域の教育力・人材力に期待できるのではないだろうか。」と述べている。継続的に教育現場でボランティア活動を行う人材はそう潤沢とは言い難い。しかし、身近な地域に存在するボランティアに対する宮崎の期待は大きい。

紙芝居という形式というかスタイルそのものが、教育的な効果があるんだと思います。もっと、いろいろな人に現場を開放してかかわってもらえば、きっと何か大切なものが見えてくると思います。そういう意味では、デジタルツール全盛ですが、紙芝居には大きな期待感をもっています。

宮崎（2023）は、「学校から子どもの文化が姿を消して久しい。そして、子どもの発達のゆがみがいろいろな社会問題を引き起こしていないか。」と述べている。デジタル機器が席卷する教育現場の中で一人一人の学習欲求をどのように満たしていくべきか、宮崎の懸念は的確である。

紙芝居が得意とする劇的な体験が今の子どもたちには必要だと思います。これからは地域の方と連携して教育を創造することができると思っています。とにかく、長年教育の世界で紙芝居をしてきてわかったのは、子どものために本当に良いものだという事です。

堀尾（1985）は、紙芝居の魅力について、「子どもの心も体も躍動している。たえず興味へはずんでいる。そのリズムにのり、刺激し、一つの未知の世界を展開して、子どもの精神を高め、変革するのが紙芝居だ、と。それが魅力なのだ、と。」述べた。宮崎は自らの実践、経験を通じて堀尾が思考した紙芝居の魅力を体現してきたのである。

やっぱり人がかかわっていることが大きいと思います。人が人に思いを伝えるということが人間理解の基本だと思うし、子どもは「人と出会いたい」と本質的に思っている存在だとは思いますが。紙芝居は演じる人、観る人の人間性というか、その人が伝えたいと思っている気持ちとか、一緒に楽しみたいという気持ちとかをひっくるめて紙芝居なんだと思います。

紙芝居実演家の右手和子は、右手（1986）で、「人間対人間がふれあうのが、紙芝居の世界です。（中略）とにかく、紙芝居は子どもにとっても、大人にとっても、豊かな感情をつちかう文化財なのです。」とした。人が人に伝えることで共感力が高まり、互いの人間性向上の一助につながると宮崎も考えている。

学校というある程度組織された集団、年齢とか目的に応じて区切られ、学びやすいように区分された集団、これらは地域でも家庭でもない特別な場だからこそ、紙芝居の力は発揮されるとこれからも信じて活動していきたいと思っています。子どもたちがこんなにも集中し、一つの文化を共有できるのはやはり紙芝居だからこそなんです。学校で紙芝居を行うというのは、他の会場で行うものとはやはり異質な点があります。目的のために組織された集団の中で目標を設定して行う紙芝居はやはり独特な価値があるんだと感じています。

学校教材としての紙芝居について、児童図書出版社・童心社の初代社長である村松金治は村松（1984）で「小学校における紙しばいの利用は、紙しばいがもっている特性から、子どもの心をとらえ、教師と子どもの親しみをつくることとあわせて、文学—国語教育の面で一番多く活用されてきたといえよう。」と述べた。教師と子どもの信頼感の醸成や国語力を高めるという意味において学校という限定された空間で行う紙芝居活動は多くの可能性を持っていると言える。

これからは私が新任の頃、40年程前にやっていた読み聞かせとか紙芝居実演とは違って、これだけAIが発展している今だからこそ、新しい価値があると思っています。紙芝居はその人の人柄にふれることでもあるから、特に今後、重要な役目を持つてくると思います。紙芝居は「むかし、むかしあるところに・・・」ばかりの世界でないだし、紙芝居は優秀な教材でもあると思っています。子どもと一緒に楽しめる文化が学級にあったら、その笑顔を見たら、先生の疲れも軽減されて明日へのエネルギーになるのではないのでしょうか。

教育学者である大田は、大田（2017）で、「みんなのかかわりの中で、ほんとうの紙芝居が、芸術（アート）として、展開することになる」とし、「さらに、紙芝居は、今日の学校のやらせ教育を、ほんとうの教育へと変えていく、大きな社会力になってほしい、と私は願っています。」と述べた。紙芝居をはじめ、子どもの周りに存在する児童文化財には大田が述べたような可能性が包含されているのではないかと。

紙芝居を演じる人も観る人も人間的な成長が期待できるし、紙芝居を実演することは登場する人物や出来事と自分自身の思いを重ね合わせるということでもあります。そのことを教師たちにもっと気づいてもらいたいと思います。学校でしか伝えられないことが実はたくさんあるのです。人の気持ちを感じとることや、互いに協力しあうことの喜びなどの学びは、学校という場だからこそできることです。利害関係もないし、後ろ向きでない前に向かって歩いていこうとする集団だからこそ、学校にはできることがたくさんあると思います。

宮崎（1991）は、「一方的に文化をおくるメディアでは、人間どうしの息の伝えあい、共同の喜び、創作の意欲への発展は期待できません。紙芝居には近代的な視聴覚機器にはない教育活動の効用があるのではないのでしょうか。」とした。今から30余年前の意見ではあるが、今や主流となっているICT教育に対する重要な警鐘である。

今、先生方は目の前の課題に対処するので手一杯なんだと思います。ですから子ども同士の問題が起きるとゆっくり子どもたちの意見を聞いてあげられない。問題の不消化が連鎖して子どもとの信頼関係が築けないんだと思います。子どもの反発やなげやりが目立つようになり、結果、教育効果が感じられない。指導がからまわりして自分が病んでしまうんだと思います。学校の中に先生も子どもと一緒に笑ったり感動できる文化活動、評価評定にしばられない時間があれば、子どもは学校が楽しくなり教師はやりがいを感じられると思います。

令和4年の公立学校教育職員の精神疾患による病気休職者数<sup>5)</sup>は、6,539人で過去最多を記録した。教育現場における教員不足も顕在化しており、今後ますます学校運営は混迷の度を深めていくであろう

う。しかし、宮崎が行ってきた教育実践からわかるように、紙芝居を通じた教育活動は子ども同士の一体感や共感性を高め、登場人物の心情に関心を持つことで他者の気持ちを理解し、子どもと子ども、子どもと大人との関係性を円滑にする効果が期待されるのである。

## 5. おわりに

本稿は教育者でありながら、数多くの紙芝居づくりにかかわってきた宮崎二美枝の生活史について考察し、宮崎がどういった思いで紙芝居を創作し、また教育現場において実践してきたのかを検討したものである。本稿のみで教育現場における紙芝居活動の意義について論じるには限界がある。しかし、教育現場における紙芝居の活用例やその効果について一定の考査はできた。また、紙芝居が教育現場に与える影響や可能性についても多くの示唆を得た。紙芝居の教育的な価値については今後も継続的かつ慎重な検討が必要であるが、本研究により、以下のことを確認した。

### （1）教育者・紙芝居作家・宮崎二美枝の生活史と紙芝居づくりについて

小学校教諭として教壇に立ちながら、多くの紙芝居を創作しつつ、自らの教育実践に紙芝居を取り入れてきた宮崎は、二男二女の末っ子として誕生した。しかし、幼少期に父親を亡くしてからは、貧しい生活を余儀なくされて育った。自身が児童文化領域にかかわるようになったきっかけは埼玉大学教育学部に入學し、児童文化研究会に入会したことに起因する。その後、大学の学友とのつながりから子どもの文化研究所の児童文学教室・紙芝居教室を通じて恩師である堀尾と出会った。1976（昭和51）年に東京都の公立学校教員として入職し、以後60歳までの35年間、小学校教諭として初等教育に従事した。また、同時に紙芝居作家および実演家としても活動し、今日までに三十六作品を発表してきた。そのうちの一つ、『青い目の人形メリーのねがい』は第60回高橋五山賞脚本賞（2021年度）を受賞。さらに、宮崎が1994（平成6）年に制作した『平和紙芝居 原爆の子 さだ子の願い』が2023年に復刻出版され、この紙芝居を活用し英語で海外に発信する取り組みや紙芝居の実演カリキュラムを高校の授業に取り入れてきた広島県立安芸府中高等学校が第8回右手悟浄・和子賞（2022年度）を受賞するなど、これまで教育現場と紙芝居をつなぐ中心的な役割を担ってきた。

### （2）教育現場における紙芝居の可能性、宮崎二美枝の教育実践について

宮崎が行ってきた紙芝居活動の中で特に意識し、実感してきたことは以下の三点である。

- ・子どもは多様なことを感じ取りながら日々を過ごしている。社会に対する不条理、恐怖なども敏感に察知しているのである。子どもと向き合う大人は誠意をもって子どもに真実を伝えていく気構えが大切である。
- ・生身の人間同士が心を通じ合える紙芝居は秀逸な教材であり、特に学校という限定された空間の中において人と人をつなぐ効果がある。また、紙芝居は演者も観客も育ちあうことができる文化財である。
- ・今後、徐々に育ちつつある地域ボランティアが活躍することで、紙芝居の特性である演劇的な体験を子どもたちに届けることができる。これからは教育関係者に限定して教育を行うのではなく、地域の人々と連携して教育を創造することが重要である。

### （3）教育者・紙芝居作家・宮崎二美枝の視点

宮崎が埼玉大学教育学部、小学校課程で執筆した卒業論文、椎名二美枝（1973）に次のような文

がある。「現在、子どもの文化環境の全般的破壊と、インフレによる物価の高騰、四兆円にもものぼる再軍備化を考え合わせてみると、戦争の足音を聞くような気がする。」これは今から 50 年前に執筆されたものであるが、まさに今日の社会情勢とぴたりと符合している。この半世紀、宮崎は常に子どもにとって必要な文化活動とは何かを模索してきた。宮崎は今、『生の声で語る、生の声を聴く学校に紙芝居を！』という運動を進めている。宮崎（2023）は、「今、生の声で語り、生の声を聴く、学習活動を再び学校・学級に取り戻したい。また子どもたちが自ら作り、表現し、伝える活動に紙芝居というツールを活かしていきたい。」としている。宮崎が取り組んできた教育現場における紙芝居活動の発展を今後も期待したい。

なお、本稿では、教育紙芝居についての歴史的考察や子ども自身による紙芝居表現については論じることができなかつた。教育現場における紙芝居の有用性及び効果については、引き続き研究課題としたい。

## 注

- <sup>1)</sup> 福音紙芝居 キリスト教の伝道を目的とした紙芝居。1933（昭和 8）年以降、アメリカから帰国した今井よねらが中心となり制作、実演された。
- <sup>2)</sup> 教材基準 昭和 42～51 年 第 1 次教材整備計画 総額 1,600 億円（うち国庫負担 800 億円）
- <sup>3)</sup> 紙芝居文化推進協議会 手づくり紙芝居コンクールの他、公演・講座の企画運営や広報誌や HP での情報発信などにより、紙芝居の普及を目指して活動をしている団体。会長は長野ヒデ子。<https://kamibunkyo.jimdofree.com/>
- <sup>4)</sup> 子どもの文化研究所 正式名称は、一般財団法人 文民教育協会 子どもの文化研究所。1947 年に設立され、子どもの育ちに関わる文化全般を対象にした研究・調査・普及活動を行っている。<https://kodomonobunka.or.jp/>
- <sup>5)</sup> 文部科学省 令和 4 年度公立学校教職員の人事行政状況調査について  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/jinji/1411820\\_00007.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1411820_00007.htm)（2023 年 12 月 23 日確認）

## 引用文献

- ・ 上地ちづ子（1997）キリスト教紙芝居 今井よねと少年ダビデ 『紙芝居の歴史』 久山社 p. 50
- ・ 宮崎二美枝（2023）学校・学級の中で甦れ！紙しばい～地域人材と教師の協働作業で～ 『子どもの文化』 2023 年 7+8 月号 子どもの文化研究所 p. 88
- ・ かこさとし（1973）『母のひろば』 105 号 童心社
- ・ 上地ちづ子（1983）特集 紙芝居入小史 教育紙芝居の台頭 紙しばい広場第 4 号 子どもの文化研究所・紙芝居研究会発行 紙芝居 20 年の歩み紙しばい広場・総集編 p. 46
- ・ 岡崎英尊（1972）児童文化のなかの紙芝居 5 学校教育と紙芝居 子どもの文化研究所編 『紙芝居 創造と教育性』 童心社 pp. 290-291
- ・ 石山幸弘（2008）『紙芝居文化史』 資料で読み解く紙芝居の歴史 萌文書林 p. 138
- ・ 堀尾青史（1972）紙芝居の創造 3 実演、この魅力ある説得 子どもの文化研究所編 『紙芝居 創造と教育性』 童心社 p. 198
- ・ 宮崎二美枝（2023）前掲書 p. 89
- ・ 宮崎二美枝（2023）前掲書 p. 92
- ・ 堀尾青史（1985）特集 紙芝居入門 紙芝居の魅力 紙しばい広場第 10 号 子どもの文化研究所・紙芝居研究会発行 紙芝居 20 年の歩み紙しばい広場・総集編 p. 110
- ・ 右手和子（1986）『紙芝居のはじまり始まり』 紙芝居の上手な演じ方 童心社 p. 17

- ・松村金治（1984）特集 小学校での紙芝居 学校教材としての紙しばい 戦後の歴史 紙しばい広場第8号 子どもの文化研究所・紙芝居研究会発行 紙芝居20年の歩み紙しばい広場・総集編p. 88
- ・大田 堯（2017）好きなことの社会的意味を 『紙芝居百科』 企画制作 紙芝居文化の会 童心社 p. 14
- ・宮崎二美枝（1991）学校教育のなかで活用を 阿部明子、上地ちづ子、堀尾青史／共編 『心をつなぐ紙芝居』 童心社 p. 136
- ・椎名二美枝（1973）子どもの発達と児童文化運動の教育的意義 埼玉大学教育学部小学校課程 教育学専修 卒業論文
- ・宮崎二美枝（2023）前掲書 p. 93

## SUMMARY

For many years, Fumie Miyazaki has been engaged in kamishibai activities as an elementary school teacher. At the same time, as a kamishibai author, she has written scripts for more than 30 works, producing works from a unique point of view that comes from her role as an educator. The present paper examines the significance and role of kamishibai activities in the field of education while looking back on the life history of Miyazaki.

Keywords: kamishibai, children's culture, theatrical expression, educational practice, kamishibai production